The Society for Research in Kunten Language

蘇悉地羯羅経の古点本

三保忠夫

蘇悉地羯羅経三巻は、唐の善無畏三蔵（六三七―七三五）の開元十四年（七二六）に訳出せる密教所依の漢訳仏書であり、略して蘇悉地経とも称する。少なくとも天平年間には請来されているが（注1）、平安時代には三部秘経（主に天台宗）、五部秘経（真言宗）の一として尊重せられたものである（注2）。

この仏書に訓点が施され、訓読史研究の対象たり得るのは次下のとおりである。先学の御指導・御助力を賜って、管見に及ぶかぎりを収集したものである。

収集したものは、勝手ながら私に分類・整理してみた。分類は、まず訓読法別、次に加点年次順とする。訓読法の未だ知れないものは、点法・加点識語等を以て然るべく配置する。

当仏書の講究・加点は、平安時代中期（九〇一―一〇〇〇）以降に盛んとなる。初期（七九四―九〇〇）以前に加点せる例は、今のところ見出せない。又、講究・加点は、真言宗・天台宗に偏っている。南都古宗の流れにある学問圏での加点例は容易に求め難い。

平安時代院政期（一〇八七―一一九二）を中心として、訓読法を比較検討するとき、当仏書訓読法には大きく四分類が可能である。これは又、真言宗の小野流、広沢流、天台宗の山門派、寺門派という宗派（学統）上の別に相応するものであり、以下にはこれを、第一類、第二類、第三類、第四類と称する。この他、孰れに属するか分明でないもの、或いは未勘のものを一括して第五類とする。

訓読法四類について、具体的なところの一端は別に述べる。本稿は、かかる訓読法の相異の基盤を知る為に、加点時・加点場所・加点者の学統、その他について検討したい。検討の不足ある点は自覚している。又、関連する蘇悉地羯羅供養法・同略疏といった古点本にも触れな

NII-Electronic Library Service

The Society for Research in Kunten Language

い（別稿）。今は訓読法の比較研究の必要上から、当仏書古点本を整理してみたい。

＊ 引用する研究文献に略称するものがある。

「点研」　中田祝夫「古点本の国語学的研究　総論篇」

「訓読」　訓点語学会「訓点語と訓点資料」

＊ 例文凡例　原本を引用する場合、そのヲコト点は平仮名、仮名は片仮名、返点は左寄一印、読点は中央・印、句点は右寄。印、声点は「」付にて示す。

＊ 第二類中の［2·1F］・［2·1G］、第四類中の［4·1B］・［4·1C］は、夫々、第一類、第三類へ配すべきものである。第五類には、訓点有無未詳のものもある。

一　第一類　真言宗小野流

○［1·1］　（欠　番）

○［1·2BA］　広島大学本　　巻中　一巻

巻子本。識語なし。本文は院政期初頃の書写に係る。

全巻に(A)朱点（東大寺三論宗点）、次いで部分的に(B)角筆点（東大寺三論宗点）が施されている。加点時は共に書写時、或いはそれに近い頃であろう。(B)角筆点は、ヲコト点一例、漢字延十ヶ字に付された仮名音形、料紙末の下欄に付された丁数（漢数字一～廿六）だけである。

○［1·3］　柿護寺本　　巻下　一巻

遠藤嘉基博士・広浜文雄氏「新版点本書目」（一〇四八）に紹介あり。筆者未見。

本文は長治二年（一一〇五）、加点（中院僧正点）は同三年に係る。

（奥書）

長治三ー三月廿日伝受了　高野点也

於理性房御本移点了

同本以一校了

長治弐年五月廿九日於鳥羽壇所書写了

願以此功徳普及一切我等共衆生皆共生極楽

一校了　　比経一事ナカラ良勝一人シテ

阿弥陀仏　　書写移点仕候也此功徳以必

南无□往生極楽之　　可生極楽御座也須都率

NII-Electronic Library Service

The Society for Research in Kunten Language

□□□□□□ハ一偏阿弥陀願カ
所楽憑也伝受功徳モ給ナリ
輪読了

高野点とは中院僧正点の別称で、明算（一〇二一―二〇六）・真興（九三五―一〇〇四）、又、それらの後資、高野山に所用せられた（点所、三七五頁）。理性房とは醍醐寺賢覚法眼、又、その住房である（注3）。良勝は、初修寺流厳覚の資、小野流を稟け、保安三年（一一二）に印信を受けた（注4）。右に関する法系は概ね次の如くである。

小野流
仁海―成尊―┬義範―勝覚―賢覚
　　　　　└範俊―厳覚―良勝―┬実任―興然―
　　　　　　　　　　　　　　└明澄
　　明算

訓点の実際は、僅か二、三例を知るのみだが（注5）、その内、「合セ索シ」（サ変動詞とされる、九五頁）が原文「令童女合索」（竹二）との箇所であれば、右は、当小野流訓読法を伝える他本、［1·5A］石山寺丁本朱点「令ム童女ヲ合セ索。」、［2·1F］高野山大学本承保点「令ム童女ヲ合セ索メム。」などに倣って補読するのが穏当であろう（助動詞シム）。因みに当条は、広沢流［2·3］音聞文庫本朱点で「令ム童女ヲシテ合セ（割合）索ヨラ。」（ヨル訓）、天台宗寺門派［4·3A］成簣堂本朱点で「令ム童女ヲシテ合（音合）索セ。」（音読）の如くに訓む。

○［1·4CBA］　石山寺丙本　　巻上中下　三巻

大坪併治博士「訓点語の研究」（七四頁）に一例の引用文がある。筆者未見。

博士の御教示によれば、巻上・中は院政期、或いは鎌倉初期の書写に係り、全巻に(A)朱点、部分的に(B)墨点が施され、点法（東大寺三論宗点）・仮名字体の同じところからすれば、同人ならずとも時を同じくして加えられたものとされ、又、巻下書写は他二巻と別筆で、(C)加点少々ありとされる。

○［1·5CBA］　石山寺丁本　　巻上中下　三帖

築島裕博士御教示による。石山寺一切経第三函第四六―四八号。折本。筆者未見。

（巻下奥書）

『（別筆）（別紙ニ記セルヲ切貼セリ）
「建久六年九月七日奉読了受者禅密房聖相殿（又別筆）也」
「永正三年二月奉写（又別筆）之本也」
　　』

NII-Electronic Library Service

The Society for Research in Kunten Language

巻上・中の奥書は、右第一行のみである。別紙とは、本巻料紙と同じものであり、或いは途中の空行面もしくは何等かの文辞面を削除して、繰り上げ切貼したのかもしれない。

三巻共、(A)朱点（東大寺三論宗点、建久六年〈一一九五〉）、(B)褐点（東大寺三論宗点、同年）が施されている。築島博士は、(B)点の方が古い訓みであるとされる。(C)墨点（仮名、同じ頃）は散在的なものである。

○【1·6BA】　高山寺甲本　　巻上中下　三帖

「高山寺経蔵典籍文書目録第一」に紹介あり。重文第一部第四号。粘葉装折型本。巻中の尾欠。巻下にのみ奥書あり（注6）。

（奥書）

建久六年於鎌倉書写了

同年九月中旬比於神護寺以

理明房阿闍梨御房御本正

交畢

本文は建久六年（一一九五）の書写に係る。各巻首に「高山寺」との単郭朱印あり。巻上、第十三丁表（分別阿闍梨相品第二、15-1）までに、(A)朱点（東大寺三論宗点、建久六年頃）があり、三帖共に散在的な(B)墨筆音義注（仮名も若干、同じ頃）がある。

建永元年（一二〇六）十一月後鳥羽院の院宣があるまで、高山寺は高雄山神護寺の別所であり、右を神護寺そのものとして受け取るには問題がある。高山寺にも小野流の法脈が伝えられており、右は或いは「於高雄寺梅尾住房」（注7）等の意かもしれない。理明房とは、勧修寺の興然（智海を改む、建仁三年〈一二〇三〉寂、八四歳、西山隠士、慈尊院）であり、門下に明恵上人高弁がある。

○【1·7BA】　所在未詳本　　巻上中下　三帖

「弘文荘待賈古書目」（第三七号）による。筆者未見。弘安三年（一二八〇）刊。高野版。粘葉装。東寺観智院旧蔵。下巻末に左の刊記あり。

（刊記）

弘安三年庚辰四月九日於関東明王院草庵書記　権少僧都能海

為統三宝慧命於三会之出世

広於一善利益於一切之衆生

NII-Electronic Library Service

The Society for Research in Kunten Language

是則守大師之遺誡偷令遂
小臣之心願謹以開印板矣
弘安三年庚辰八月日
従五位上行秋田城介藤原朝臣泰盛

表紙右下に「真昭　伝領真源」（鎌倉時代墨書）とある。出資者安達泰盛は、出家して高野山金剛三昧院に住した。全巻に施された(B)墨点（仮名点）は、字体や撥音表記法などより推せば鎌倉後期のものか。(A)朱点（円堂点か）の存在は確かでない。

○［1.8 BA］　所在未詳本　　巻中　一巻

「三都古典連合会創立十周年記念古典籍下見展観大入札会目録」（昭四七・十二）による。筆者未見。

本文は南北朝期の書写に係り、同期の訓点二種、(A)墨点（仮名点、漢文注）、(B)朱点（同、声点・ヲコト点あるか）が施されている。朱筆漢文注には仁海の説が引かれている。仁海（九六五―一〇四六、寂九二歳）は、聖宝―観賢―淳祐―元果―仁海―成尊という法流にある。

○［1.9 BA］　醍醐寺本　　巻上中下　三巻

小林芳規博士御教示による。筆者未見。

本文は鎌倉時代の書写に係る。(A)墨点（仮名点）があり、(B)朱点（句切）は応永元年（一三九四）のものが主とされる。巻下に左記あり。

（巻下奥書）
（朱）『一交了』　法印権大僧都隆宥
（墨文別）
応永元年甲戌八月十四日伝受畢

隆宥は、報恩院流（小野流系三宝院流末）の僧とみられる。聖宝以下累代の事蹟徳行を記した醍醐寺付法伝一帖（所在未詳）を明徳元年（一三九〇）に書写す。大通寺蔵増益護摩一巻（喜多院点）の奥書の一条に、「応安五年（一三七二）九月廿四日以報恩院門跡相承之御本書写畢　金剛資　隆宥」ともみえる。

○［1.10］　東寺宝菩提院本　　巻上中下　三巻

中田博士（点研、六九五頁）の、観智院法印呆宝点が加点せられているとして紹介されたもの。筆者未見。

（奥書）
本云右一部三巻任覚大師疏加愚点訖、於真言者以石山本所写点指声已、経釈深細短慮易迷追加精研可削

NII-Electronic Library Service

The Society for Research in Kunten Language

直之、願以此功德生々世々値遇密教終成菩提而已
延文三年戊(一三五八)七月二十六日法印杲宝記生年
(以下に追加補筆の識語あるが省略する)〈ママ、三係〉

右手今の条には誤写があるらしい。杲宝(一三〇六―一三六二)は、高野山に学び、後に東寺に観智院をひらいた(勧修寺流末流)。「傘の聖教」と称される大部の写経を東寺三密蔵に収め、金剛頂経の全訳たる三十巻教王経に初めて着目したほどの碩学であるが(注8)、右の点法については分明でない(注9)。慈覚大師円仁の略疏を以て加点したところに注意される。

二　第二類　真言宗広沢流

○〔2・1 H~A〕　高野山大寺図書館本　巻上中下　三巻

薬師・小林両博士の移点本による。筆者未見。

旧高野山光明院蔵。巻子本。紙背に「元興寺」朱印。巻尾、紙背経印として「勧修寺大経蔵」複廓朱印(近世)。表紙(後補近世)の袖にも「勧修寺大経蔵」の墨書あり。もとは南都元興寺の一切経中にあったものとされ(注10)、春日博士は天平十二年頃の書体、薬師・小林両博士は奈良時代から平安時代初期の書体であるとされる。先に、曽田氏によって語彙の紹介と識語の解釈とが試みられている(注11)。まず、識語を掲げよう。

(巻上奥書)
(橙)以治安三年四月十二日点了　求法沙門公教(?)
(朱)天仁元年九月四日於華蔵院律師伝受之
沙門聖恵

(江戸期の別紙墨筆)
『延享三年歳戊乙丑孟春廿八日
加脩復了今此全部三巻非只徒之
筆力勿容易矣
僧正賢賀　世寿六十有二　』

(巻中奥書)
(朱)天仁元年九月廿一日於華蔵院律師伝受了
沙門聖恵

(別紙墨筆)
『延享二歳乙丑青陽廿八日加脩復了
僧正賢賀　行年六十二歳　』

(巻下奥書)
(朱)寛弘五年四月十八日読了　南御室御伝法

NII-Electronic Library Service

The Society for Research in Kunten Language

(白)承保元年十一月廿八日　於高野山中院明算
山籠奉受了　寛智
(朱)天仁元年十二月十五日於華蔵院律師伝受了
沙門聖恵

(別紙墨筆)
『右全部三巻非並人之筆勢豈為
秘蔵焉加猶復収函底了是偏為
密教弘通且又為当流紹隆耳
延享二乙丑歳正月廿八日小野末資賀春秋六十有二』

訓点には少なくとも八種がある(A点～H点)。

(A)白点(第六群点)。識語なし。加点は寛弘より少し遡る頃で、密に施されているが、判読は容易でない。訓読法は古広沢流とでも称すべきもので、仁和寺系寺院に於ける奉読であろう。

(B)朱点(第五群点、寛弘五年〈一〇〇八〉)。識語に「南御室御伝法」とある。曽田氏は、従って、当朱点は守多法皇御伝法の点であるとせられるが、訓読法比較の上からすると、従いがたい。南御室とは、守多法皇が延喜四年、仁和寺に創められた営室であって、後、これを相承する親王は御室と号した(注12)。右の南御室に擬するに、寛空(天禄三年〈九七二〉寂、八九歳)・寛朝(長徳四年〈九九八〉寂、八三或八四歳)が挙げられようが(注13)、前者は年代的にやや早すぎる。後者は、法皇の孫にして入室の弟子でもあったが、南御室と号した記録が、今のところ見出せない。より可能性の大きいと思われる今一人は、国立国会図書館蔵大日経の奥書、治安二年(一〇二二)の条、聴衆八人の内に南御室とみえるものであるが、何人の謂か未詳である。「南御室御伝法」についても、講説を承けて加点したものか、或いはそれを伝える訓点を移したものか、分明でない。先の(A)白点とはやや趣の異なる古訓法がみえるが、訓読法は広沢流のそれである。

(C)朱点(点法未詳、仮名のみか)。識語なし。加点は寛弘から治安の頃で、やや散在的である。

(D)朱点(喜多院点)。加点は巻上・中だけ。識語により、治安三年(一〇二三)の加点。加点者は公教(親)かとされる(築島博士)。

(E)角筆点(喜多院点)。識語なし。巻下前半部三分の一に加点。加点時・加点者は右(D)点と同じか。訓法の若干について小林博士の言及がある(注14)。

NII-Electronic Library Service

The Society for Research in Kunten Language

(F)白点（円堂点）。識語により、承保元年（一〇五四）、寛智が明算に奉受したものと知られる。明算（嘉承元年〈一〇六〇〉寂、八六歳）は、高野山中院流の祖と仰がれた。高野山竜光院蔵大日経七巻には、明算によって小野流訓読法が施されている（天喜六年〈一〇五八〉、中院僧正点、注15）。寛智（天永二年〈一一〇九〉寂、六七歳）は、仁和寺の華蔵院律師、禅明房・勝寺と号し、性信から受法した（注16）。

当承保点は小野流訓読法を伝える。仮名濁音符の所用もある。国会図書館蔵大日経嘉承三年点などから窺われる如く（注15文献）、寛智自身の訓読であれば、広沢流訓読法に依拠するはずであるが、明算に奉従した為に、右の次第となったものらしい。所用点法は円堂点である。これは仁和寺広沢流系寺院で多用されるものであるから、これが、寛智自身の常用の点法であったとみられる。

(G)朱点（円堂点）。識語には、天仁元年（一一〇八）聖恵が右の寛智から伝受したものとある。散在的な加点であり、右承保点を補足するものと思われる。聖恵（保延三年〈一一三七〉寂、四四歳）は、寛助の付法により、華蔵院宮・長尾宮と号した。従って、円堂点所用であるのは首肯できるが、寛智は、聖恵に伝授するに、彼が明算から稟けてきた小野流訓読法を以て行なったらしい。

聖恵は、この年（嘉承三年、八月改元して天仁元年）、寛智から大日経の訓説をも伝受している。前出の大日経嘉承三年点がそれである。してみれば、彼は三部大法を承けたかとみられ、或いは金剛頂経の加点本も存在するかもしれない。神日―寛空―寛朝・寛静などには三部大法が授受されている（注2文献）。

大日経は広沢流、蘇悉地経は小野流、と訓読法を異にするのはそれ自体で興味ある問題である。抑、寛智が、碩学とはいえ異流の明算に奉従するとき、如何なる事情が存したのか。この点につき、未だよく勘究ないが、その一としては、十一世紀前半時に於ける仁和寺では、蘇悉地経の講究が十分でなく、訓読法が未だ浮動していたことが考えられる。先行する(A)白点、(B)寛弘点、(D)治安点、(E)角筆点などと、後の広沢流訓読法との間の若干のずれからしても、この期の当流訓読法は十分な固定的状態にはなかったとみられる。更に検討したい。

(H)墨点（仮名点）。識語なし。加点時未詳（延享二年賢賀の付訓か、築島博士）。巻上・下に散在している。

NII-Electronic Library Service

The Society for Research in Kunten Language

以上、当本の訓点である。(A)点から(G)点までが仁和寺広沢流の僧によって加点せられたものとみられる。この内、(A)点から(E)点までは広沢流（古広沢流）の訓読法、(F)点と(G)点は小野流のそれを、夫々伝えるものである。

尚、当本は、南都元興寺、十一世紀仁和寺を経て後、江戸時代中期延享二年（一七四五）に勧修寺賢賀の伝得・修復・押印するところとなり、更に、山階宮晃親王より光明院へ寄進せられ、後に現蔵所に移ったものである。

○【2・2 BA】　高山寺乙本　　巻上　一巻

「高山寺経蔵典籍文書目録第一」に掲ぐ。重文第三部第六六号。巻子本。識語なし。巻首欠。補修の際に料紙首尾が切除され、又、錯簡が生じている。

本文は院政期初の書写に係り、全巻に同期の(A)朱点（円堂点）、散在的な(B)墨点（仮名点）が施されている。紙背補修部には、暦応・康永・嘉吉との年号をもつ写経紙断片が用いられ、その内一片にも円堂点がみえる。

○【2・3】　竜門文庫本　　巻上中下　三帖

粘葉装枡型本。表紙に鎌倉中期墨筆で「梅尾高山寺経蔵」、裏表紙端裏に同期墨筆で「禅浄房第二箱」（巻上・下のみ）、内題下に「高山寺」及び現蔵所の単廓朱印がある。

（巻上奥書）

（朱）「沙門日蔵　交点」

保延五年六月十五六両日奉交了

（巻中奥書）

（朱）「□年□　沙□交点了」（抹消）

保延五年六月廿日奉交了

（巻下奥書）

保延五年六月廿六日奉交了

右巻中の朱筆は抹消されていて判読できない（年紀として安元・元暦・安貞の如き文字があるようにもみえる）。禅浄房は、高山寺の住僧・僧房であろうか。高山寺蔵大方広仏華厳経入法界品四十二字観門一帖（重文一ノ七七）の奥書にも「禅浄房第三箱」（治承二…玄證）などとある。長円筆録の梅尾説戒日記によれば、寛喜三年（一二三〇）二月から七月まで高弁に代って説戒を勤め、八月

NII-Electronic Library Service

The Society for Research in Kunten Language

十五日の高弁戒説の折の着座の衆の一人であった人物に禅浄房がいる（注17）。高山寺蔵上人之事一帖の外題下には「禅浄房記」とある。当書は、寛喜元年頃成った自筆聞書であるとされる（注18）。同寺には、「禅上房書籍欠目録」一巻（第一部三四八号）を現蔵するが、当音門文庫本も、禅浄房所蔵の一点であったかもしれない。朱点との直接的関係は未詳である。

朱点（西墓点、院政期末）の加点者、日蔵についても未詳であるが（注19）、この訓読法は広沢流のものである。三井寺寺門派以外で、西墓点を用いることは果してなかったのであろうか（注20）。

朱点には、当仏書三巻についての完備した広沢流訓読法を提示するという長所がある。又、ヲコト点が比較的少なくて片仮名が多い。仮名点本への過渡的様相を呈するものであって、実見したかぎりの古点本中では最多の仮名付訓例であろうか。全音節付訓が多い為に、撥音便、促音便その他の用例も多々求められる。ミ（・ミ）の仮名表記に関しては、助動詞ムに次の(イ)(ロ)の連例がある（漢字音表記も若干混用）。又、濁音符に関して(ハ)(ニ)がある。

(イ) 云（イカンカ）何 試（コロミン）真言　（上 2/6）

(ロ) 若し詣（マウテウ）は……前（マエ）に　（上 41/9）

(ハ) 此れは 是れ訶（イサブル）声なり・　（上 12/1）フの右肩単点

(ニ) 用て。薩（菩）。折（サ）。（薩婆）難（シャト）。（平薩）・……（上 57/4）サの〃

三　第三類　天台宗山門派

○［3.1］　石山寺乙本　　巻上　一巻

築島・小林両博士の御教示による。筆者未見。巻子本。石山寺一切経函附一四六号。

本文は平安中期の書写に係る。天暦頃の朱点（乙点図）が施されている。人物を表わす「者」字に「人」訓がみられる（73/11）。乙点図所用資料には、未だ多くの問題があって単純には扱えないが、「午暮時也皆持繋腰」（41/2）に「又也」訓があるところからすると、訓読法は当類（古山門派）に属するらしい。

○［3.2］　高野山親王院本　　巻上中下　三巻

既出「新版点本書目」（三・六頁）、「平安遺文　題跋編」（五〇頁）による。筆者未見。

（巻上奥書）

NII-Electronic Library Service

The Society for Research in Kunten Language

長尾吉祥房点本也　而入室弟子天台僧法安伝読畢
天喜六年三月八日読了
一見了々　見合疏了
四十一回注ム付之　覚雲
（巻中奥書、右天喜の条までの三行、省略）
（巻下奥書）
長元六年十月廿三日大和国宇多武峯延殷阿闍梨奉読此経僧尭円
右につき、巻下奥にも長尾云々、天喜云々の条があってよさそうだが、今は知り得ない。
訓点に、長元六年（一〇三三）尭円が延殷に従って加点した朱点（室憧院点）がある。天喜六年（一〇五八）天台僧法安の加点もあるかもしれない。
大日経の親王院蔵本七巻長元六年点（注15文献）と比するに、識語は大同である。彼れ此れ、三部経として訓読せられたものらしく、とすれば、金剛頂経加点本の存在も推測される。
延殷（永承三年〈一〇四八〉叡、八三歳）及びその資尭円が、山門派の良源・皇慶の法流にあることにつき、築島博士（注15文献）の言及もある。大原法橋延殷は、西塔香積房僧都懐空の資で、「頭密優長之侍器也」（注21）と伝えられ、皇慶伝の悉曇学の他に慈覚大師相承の五箇秘曲、錫杖脈の系譜にも連なる（注22）。初めは東寺景雲に両部を承け、後、大原に住し、次に醍醐寺に入ったという（注23）。伊勢長尾山、大和国磯城郡多武峯村妙楽寺は、山門系寺院（青蓮院末寺）であり、後者は大原山魚山流声明道場との交渉もあったとみられる。

○【3・3】　青蓮院吉水蔵甲本　巻上中下　三帖
「昭和現存天台書籍綜合目録」（四三四頁）による。筆者未見。
（奥書）
康平七年（一〇六四）……於駿州松野点了
天台沙門　僧平快本
同目録には、又、蔵所を同じくする大日経五帖（巻一・二欠）・金剛頂経三帖の奥書が載せられている（四三六・四三三頁）。奥書内容からすると、これらも三部経としての奉読・加点であろう。

○【3・4 CBA】　東北大学図書館本　巻上　一巻

NII-Electronic Library Service

The Society for Research in Kunten Language

小林博士・沼本克明氏と共同調査による。巻子本。本文は院政期初（長治元年〈一一〇四〉か）の書写に係る。村上雅孝氏の書誌的所見・訓点・訓法若干・和訓一覧が提出されている（注24）。

（奥書）

（白書）「点後一校了」

（墨書）「点本云康和四年九月廿九日於宝泉房以他本奉受了
長治元年十月十七日以観音院御本移点了
求法沙門延懐」

訓点には、(A)白点（宝幢院点、長治元年）、(B)墨点（仮名、同じ頃延懐の点後一校時）、(C)墨点（仮名、院政期）、他、近世の墨点がある。文政八年の裏書があり、略疏、類音・和名抄などが引用されている。

(A)白点の祖点本奥書にみる宝泉房とは、山門系大原勝林院の塔頭であり、点法・訓読法との間に矛盾はない。台上坊阿闍梨延懐については村上氏に詳しい。明覚・良忍に学び、家寛を資とする、延暦寺西塔の学僧で、諸文献奥書等よりすれば、康和三年（一一〇一）から大治三年（一一二八）までの活動が知られるとされる。私見では更に、兵範記の長承元年（一一三二）九月十九日条にみえる活動がある（史料大成）。観音院は、従って、同じく山門派に属するものであろうが、未だ審かではない。村上氏は「真言宗の中心である仁和寺や東寺にゆかりのある寛意」を、まず想定されているが、訓読法からすれば従い難い。今、疑わしきままに掲げれば、一は叡山西塔の「観音院」（三塔諸寺縁起、目録、本文中には「観音堂」、注25）、一は横川首楞厳院の「根本観音堂」（同縁起、他）がある。横川は、円仁の開発に負うところ大きく、東塔の金剛界、西塔の胎蔵界に対してこれは観心心・蘇悉地根本法華等を象るという（山家要略記浅略、三塔象事、注25文献）。又、右孰れかは判らないが、観音堂で書写・移点したとの記録があり（注26）、更に東寺金剛蔵蔵五秘密儀軌一帖の奥には、「…件本云古本云以大教房御本一交了　件本以延命院御本書写以観音堂阿闍梨御本被点之」との本奥書一条がある（応保二年の書写・移点本、宝幢院点、点研、四八二頁）。延命院も坂本在であり、大教房も後述の「4.C」京都大学本墨点の加点識語のそれと関係しそうである。

(A)白点に左の訓法があり、下欄に(B)点墨筆で「師伝云」とある。

NII-Electronic Library Service

The Society for Research in Kunten Language

平[去]暮の時には（また也）皆持て繋よ腰に。（4-2）

訓読法の他三類では文末助字として扱う系であり、右[4-C]京都大学本墨点や先の[3-1]石山寺乙本朱点にマタ訓がみえるだけである。従って、当訓法は山門派独自のものであるが、同派でも[4-B]京都大学本朱点は文末助字（不読）とする。山門派内部にも更に小さな異流があるとみられる。

尚、延懐は三部灌頂を受けている。密宗悉曇章の奥には、「大治戊申歳（一一二八）仲秋辛未日於九条壇所為受学真言同注馳筆鈔之　天台山西塔院伝授三部灌頂沙門延懐記」とある（注27）。

四　第四類　天台宗寺門派

○[4-1 CBA]　京都大学図書館本　　巻上　一巻

巻子本。本文は平安時代中期初頭の書写に係る。殊に当本(A)白点については先学の言及が多く、主なところでは、吉沢義則博士（注28）・中田博士（点研、三七四頁）・築島博士（注29）・小林博士（注14文献、七三七・七六六頁）・松本健二氏（注30）等の論がある。

（奥書）

（白）延喜九年八月廿二三両日読了　　空恵記

（墨）承暦三年九月一日奉従智妙房阿闍梨奉読了　公遅

（墨）保安二年七月廿日於大教房奉受了六ヶ日　　仁昭

訓点には、(A)白点（西墨点、延喜九年〈九〇九〉）、(B)朱点（仮名点、承暦三年〈一〇七九〉）、(C)墨点（仮名点、保安二年〈一一二一〉）があり、更に後代の墨仮名四種くらいが散在している。(B)朱点は、第三品の初二行までの墨点（(B)点）と交替せるもの、(C)墨点は散在的なもの。

(A)白点の加点者、空恵が円珍の資であること、諸先学の言及せられてきたところである（師、円珍・静観、資、禅芸）。寺門伝記補録巻第十五に「補四王院十禅師」（大日本仏教全書）、貞信公記の延長四年三月七日条に「空恵定心院・運昭四王院解文可令申事、仰忠行（阿乃）」（大日本古記録）と伝える。

当白点により、西墨点なるヲコト点法は、少なくとも延喜年間（九〇一―九二三）の頃には成立していたと認められる（注29文献）。訓読法は当第四類のもので、やや古訓法を伝える（古寺門派）。

NII-Electronic Library Service

The Society for Research in Kunten Language

(B)朱点につき、中田博士（点研、三七六頁）は、保安二年に仁昭の加えたもの、又、公暹・仁昭との名は園城寺の記録に散見するものとせられるが、私見では右の如くである。又、公暹・仁昭が寺門僧であるという記録は確認していないが、その訓読法は(B)点・(C)点共に第三類のものである。加えて、(B)点を検すれば次が知られる。

1　接続助詞バ・係助詞ハによる訓法がむやみと多く、このままでは国文訓み下しが不可能である。即ち、これらは助動詞ムに訂正せらるべきであり、事実、その内多数が(C)墨点によって訂正されている。この訂正は、当類の他訓点によって首肯せられる。逆に、ハとすべきをムと誤る例もあり、この方は右より少ない（この条、訓読史上の長文化傾向に沿うものである）。他、ヲとすべきをモ、トとすべきをテ、ハとすべきをテ、スとすべきをヲの如く誤る例がある。

2　ヲコト点かとみられるものがある。「獻(レ)……諸ノ使者」（49ー1）の右中央の星点、「当シ……貫ー置」右ノ手ノ無名指ノ上ニ。」（49ー2）の左肩の星点がそれである。

右二点、後者は存疑としても、前者からすると、この(B)朱点は宝幢院点所用の点本を祖点とし、これを仮名に翻点したものと考えられる。(B)点朱筆には、或本・イ・或、などの校合があり、祖点本が存したとみることは可能である。恐らく、公暹は奉従に先立ってかかる翻点をなしたのであろう。それが機械的であった為か、或いは急がれた為かで右の如き祖点（宝幢院点）の誤読が生じたものと考えられる。

(C)墨点の加点者、仁昭は、妙法院（叡山西塔妙香院を継承す）に蔵せる妙法蓮華経八者印儀軌略抄一巻の本奥に、「保安二年歳次辛丑九月……書写……仁昭之本……」とみえる人物と同じであろう（注31）。大教房とは、同じく妙法院蔵の宗義相伝集一巻の奥、相承（次第）の条に、大教房阿闍梨永義・同最厳とみえるところと関係しそうである（昭和現存天台書籍綜合目録、三二三頁）。最厳は長宴の法流下にある（点研、三九四頁）。又、永義・最厳、孰れかはわからぬが、大教房なる人物は、天永元年（一一〇）三昧阿闍梨良祐本を写す（釈迦会不同一帖、同目録、八四一頁）、同二年良実に授学す（金剛薩埵修行成就儀軌一帖・白傘蓋仏頂経一帖、同目録、五一七・六六八頁）、保安二年良実に授学す（大乗文女法一帖、同目録、

NII-Electronic Library Service

The Society for Research in Kunten Language

七三頁）、天承二年（一三二）青蓮房で行玄に授学す（青蓮院蔵此沙門経一帖、平安遺文、題跋編、一八三頁）の如き事跡が辿られ、右の他に、星慶・長寛・範胤・家寛・真舜らとの交流があったと知られる（仁都波迦点・宝幢院点の所用者）（注32）。

尚、醍醐寺三宝院蔵金剛頂瑜伽経巻一の奥に、

承暦二年九月十日奉従智妙房阿闍梨奉読了　公遅

保安二年七月十二日於大教房奉受了　仁昭

とみえる（注33）。してみれば、(B)朱点・(C)墨点は三部経一体としての奉読・加点か、又、孰れかに大日経加点本も存在するか、と推測されよう。

○「4・2」　三井寺法明院本　　巻上中下　三巻

「新版点本書目」（三八頁）及び中田博士（点研、五八頁）による。巻子本。筆者未見。

（巻上奥書）

〈巻上巻首二十五字があるが省略する〉

（末）大治五年五月六日於勝光房座下奉受了

（墨）被記云

寛治二年七月十九日以親定房御本書写之了

沙門昌遅

（朱）同八月十七日以同本移点了

但所書墨点ハ十妙房本也

同十二月廿一日勝幢房座下奉受了

同役人雙称房月城房喜集房最勝房上善房光〃

浄房慈教房

永長二年六月廿九日（ヨリ）至七月二日三日之間〃

奉経□（桂陽か）揚房奉

講了只□□□（読か）目録之点ハ御房之也

昌舜

久安四年旧六月九日以法眼御房御本校定了此経〃

即以此本書経也

昌遅阿闍梨自筆本也

珍慶記之

久安五年正月十三日於（僧都御か）房御座下題　奉交了

仁平二年五月四日一日之間奉読月上房了

拝揚□□（桂陽か）経奥記云

康平三年四月十五日奉従実相房読之了　竜雲房〃

移点□□僧云記之始自九日　自問所読也

巻中では、右仁平二年の記事相当部までがあり、大同

NII-Electronic Library Service

The Society for Research in Kunten Language

）、巻下では、大治四年に「書了」があり、仁平二年以降に左記がある。

仁平二年五月六日九日三日於月上房座具奉受之了
先年於都御房（僧脱か）法眼前奉受題許為　久住　伝受之
以此等三部大法師資相承□□慈　書也
珍慶記之

康永三年十月廿一日以此本□□加伝受儀　訖
精進金剛行弁記

原本に即かねば識語の正しい解釈はできないが、現存本は、大治四年（一二九）の書写、同五年の移点（西墓点）になるものであろうか。この大治本は、更に久安四年（一一四八）の校定（珍慶）、同五年・仁平二年（一一五二）の奉読（同人か）を経て後、康永三年（北朝、一三四四）に行弁の伝受するところとなり、今に連なる。

大治本は、寛治二年（一〇八八）に昌運が書写・移点（朱墨）せるものを祖本とする。この間には、永長二年（一〇九七）に昌舜の加点があった。昌運は、鶏定房本、又、十妙房本を祖本とし、勝幢房座下で奉受・加点をもなした。

以上が概ねであるが、康平三年（一〇六〇）の童雲房・実相房の訓読法を伝える一本が、永長二年昌舜・鶏定房本の執れに関与するか、又、久安四年の法眼御房本が寛治二年昌運本を指すか否か、などの未詳の点がある。

鶏定房念円（一〇二四―一〇八四）、実相房頼豪（一〇〇四―一〇八四）、童雲房慶祚（一〇九寂、六五或七三）が、共に寺門派の碩学であることについては築島博士の言及がある（注34）。慶祚も寺門派祖点者群の一人とみてよいかもしれない（注35）。

巻下奥書にみる如く、当点本も三部経として相承されている。「新版点本書目」には、当条に続いて大日経七帖・金剛頂経三帖が紹介されているのであり、三者は、点法・蔵所を等しくし、寛治二年以下の識語の類似がある。その内、大日経古点は、築島博士が、天台宗訓読法を伝えるものとして取り上げられているが（注15文献）、その巻七の奥「被記云」により、又、当蘇悉地経によれば、その大日経も大治五年の書写・移点に係るとみうけられる。

○【43】　お茶の水図書館成簣堂本　巻下　一巻

巻子本。徳富猪一郎氏旧蔵本で、田中氏（注10文献、年表二一頁）、山田博士（注36）が紹介されている。

NII-Electronic Library Service

The Society for Research in Kunten Language

（奥書）

（朱）永長二年七月一日始奉受（南山□□間也）同七日奉受了（存疑）禅円

（朱）嘉保三年九月十九日以御本移点了

〈巻尾端裏〉

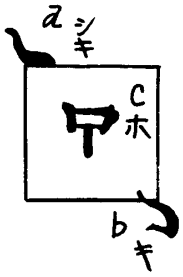
（墨）久安元年後十月自九日至于十四日合六ケ日之間

奉受　大勝坊了行□

本文は嘉保三年（一〇九六）の書写に係る（若干の錯簡あり）。訓点には、(A)朱点（西墓点）と散在的な(B)墨点（西墓点、久安元年〈一一四五〉）とがある。(A)朱点は嘉保三年の移点に係るが、永長二年（一〇九七）に一部その抹消・補訂があり、別訓等が施される。両時の筆は完全に区別していくことは難しい（同一人の筆か、一は細く、一は太い）。

南山とは高野山か、或いは叡岳南山（無動寺渓辺の天台南岳）か。だが、大勝坊とは、東寺蔵仏説毗沙門天経一帖の奥の一条に「久安三年十月以大勝坊阿闍梨御本書写之了／（朱）同十五日移点一校了／比丘珍伊比之」（点研、二八二頁。新版点本書目、二二頁）とみえるものと同一人であろう。これは西墓点を所用せるもので、本奥には、承暦四年に法輪院覚猷の移点せるものを、後に延猷が書写・移点したとある。東寺蔵北方毗沙門天王現身念誦要経一帖、高野山宝寿院蔵慈氏菩薩儀軌一帖などの奥書にも大勝坊がみえ（平安遺文題跋編、三一二・三二八頁）、又、円珍・覚猷・延猷の名がみえる。円珍・覚猷（一〇五三―一二四〇）はもとより、延猷も覚猷・頼豪加点本に即いて学んだ寺門僧であり、大勝坊も同派僧とみてよい。

(A)朱点の点法は典型的な西墓点である。下図のヲコト点、a・bは「4・A」京都大学本白点にも存するが、西墓点におけるcは、当朱点によって初めて知られる。別訓を施すに際し、当該漢字の左傍に方形枡目を設けて行なうことがある。西墓点本にままみられる方法である。略疏、王篇・蔣魴切韻・小切韻などからの引用があり、引用文中の反切注や本文仮名付訓にもまま差声がある。



(イ)王云撚乃弥反／謂接続／相／也／蔣云撚奴典反／以毛指／按物　（66頁下欄、本文「合一撚ムにほ」）

(ロ)唱餌草（634本文、左右漢字朱筆）

(ハ)採・（285本文真言）

音注符号の一形式として、「詰を」（34―4）・「特

NII-Electronic Library Service

The Society for Research in Kunten Language

[去濁][ミセケチ]食を、」（59/6）・「説音悅エチ」（59/1）があるが、稀に「撓[去]」（79/8）もある。又、原則として さは〱・などで表わすが、「蓮花（ハスノハナ）」の音訳語について「鉢[去]頭[上濁]途邑反摩[上]・」（30/5）とある。

○[4・4 BA] 所在未詳本　巻第一　一巻

「弘文荘待賈古書目」第九号（昭十二・三）所掲写真による。巻子本。尾欠。紙数八葉。本文書写、及び訓点の(A)朱点（西墓点）は院政期初頃であり、(B)墨点（仮名点）はそれより若干下る如くである。(B)点に略疏の引用あり。

五　第五類　その他のもの・未勘のもの

○[5・1] 田中教忠氏蔵本　巻中　一巻

田中氏（注10文献、三四五頁）による。筆者未見。

（奥書）

天応二年（七八二）正月二日

○[5・2] 石山寺甲本　巻上　一帖

築島博士御教示による。筆者未見。石山寺一切経第三函第六〇号。零本。折本。但しもとは巻子本。巻首の料紙一葉欠、択処品第五以下欠。

本文は平安時代中期（前半か）の書写に係る。同じ頃に施されたとみられる朱点は乙点図である。そのヲコト点のキは、未だ壷の内部にある。乙点図所用資料は仮名字体の一致が甚しいとせられるが（注37）、殊に当朱点のア・ク・コ・ス・テ・ネ・マ・ミ・モ・ユ・ラ・ル・ヱなどは、乙点図所用資料の中でも略疏の京都大学本（旧石山寺蔵、寛平八年隣昭識語本）のそれとよく似ている。訓読法も古態である。後代訓読法に照らせば、小野流・山門派、双方の性格に通じており、今のところは孰れとも決し難い。しばし当類におく。乙点図所用資料には、副助詞イがみられないとされるが（注37文献）、当朱点には左掲他の幾例かがあり、理解に苦しむ。

如此、之人イ・則得成就。（16/8）

○[5・3] 高野山西南院甲本　巻上　一巻

「平安遺文　題跋編」（六一頁）による。筆者未見。

（奥書）

NII-Electronic Library Service

The Society for Research in Kunten Language

（朱）延久三年（一〇七一）正月廿二日請了

（墨）僧良照

右墨筆が伝得識語であれば詳述するが、今保留する（三井寺・仁和寺・高山寺の関係文書に良照なる人物がいるが、年代がやや下る）。

○［5・4］　青蓮院吉水蔵乙本　巻上下　二帖

「昭和現存天台書籍綜合目録」（四四四頁）に紹介あり。巻中は欠か。筆者未見。

（奥書）

承保二年（一〇七五）十月……於善峯北谷禅明房未時許書了

他仏書奥に善峯北山禅明房ともみえるが（同目録、一五六頁）、未勘とする他なし。

○［5・5］　真福寺宝生院本　巻上中下　三巻

奥書は、巻上・中に「三交了」、巻下に左記がある。

（巻下奥書）

（墨）保延三年丁酉九月十九日金剛峯寺之安養院之西房ッテ書写了

同廿一日一交了

本文は保延四年（一一三八）の書写に係る。書写・校合時の筆であろうか、若干の墨点（仮名、字音）がある。安養院には、醍醐寺より伝得せる典籍が多いとされ（田中稔氏）、右墨点も第一類系のものらしい。

○［5・6］　高野山西南院乙本　帖一・三・四・五　一帙四帖

築島博士御教示による。粘葉装。筆者未見。帖仕立からすると略疏ではないかと疑われるが、しばし外題に従って当類におく。本文は仁平二年（一一五二）の書写に係る。

（帖三奥書）

仁平二年壬申十月十二日於松山院以慈勝房御本書写之畢　勝賢

（朱）「以書本移点了　（花押）」

仁平三年癸酉六月廿日於慈勝坊御座下奉受之了　勝賢

（別墨）

承安二年六月十六日聖願寺奉従阿闍梨御房奉受了

（又別墨）

承久元年六月廿四日伝賜□□□□（三字スリケシ）僧正御房之御本了

右の他、寛（宝カ）永元年の墨筆がある。他帖はこれに大同。但し、帖一では朱筆六字が仁平三年条に後置され、帖三では承久の一条がない。

NII-Electronic Library Service

The Society for Research in Kunten Language

訓点には、(A)朱点（西墓点、仁平三年）、(B)墨点（仮名点、承久元年〈一二一九〉）、があるとされ、承安二年（一一七二）の訓点有無は未詳である。

誓願寺とは今に連なる京都市内のそれであろうか（浄土宗）。慈勝房につきては、「山家灰太流受法次第（次三昧流事）」の条末、「浄土寺ノ慈勝僧正。菩提院ノ澄覚親王。皆是隆禅ノ御弟子也。山門ノ教相ハ。只タ彼ノ家ノ抄物ヲ用ヒ来ル者也」（注38）とあるのが参考になるかもしれない。用例は省くが、訓読法は天台宗のものと認められる。

○【5・7】　三宝院経蔵本　　巻上下　二帖

吉沢博士（注33文献、一〇八頁）による。巻中欠。筆者未見。三宝院とは、高野山・醍醐寺の塔頭のそれであろうか。巻下奥書は左記に大同である。

（巻上奥書）

四年九月十七日枯向寺上界房理證本一交了仁〃
平三年云々

以三本一交点了此本付属主上乗房阿闍梨秘本朱点也
嘉禄二年丙戌卯月十日執筆幸俊

嘉禄元年初冬比伝授入壇生年四十三美州清水寺〃
正印阿闍梨奉値伝受書写交点之本美州枯向寺教〃
覚闍梨本偏為仏法興立広作仏事也　金剛仏子〃
源慶
理證聖人許可祖師第三伝源慶

本文は嘉禄二年（一二二五）の書写に係る如くだが、詳しいことは知り得ない。

○【5・8BA】　所在未詳本　　巻（上）中　一帖

「弘文荘善本目録」（第三〇号、昭三二・一〇）・「三都古典連合会古典籍展観入札会目録」（昭三九・四）の所掲写真による。筆者未見。

楮紙十六葉、粘葉装仮型本（縦二六・〇糎、横一五・八糎）。巻中尾題に至る一帖だが、巻上末品の獻食品第十一などを含んでいる。本文は院政期初頃の書写に係る。

（奥書）（朱）

承久三年己酉十一月十一日於寂光院校点了五師隆詮

訓点には、(A)朱点（喜多院点、承久三年〈一二二一〉）、(B)墨点（仮名点、行中夾雁点、鎌倉初期）がある。(A)朱筆に、略疏他を引く漢文註がある。(B)墨点は第二類の訓読

NII-Electronic Library Service

The Society for Research in Kunten Language

法を伝えるものか。

寂光院とは大原のそれ、隆詮とは明恵上人の高足。尚、当本は、本文一面七行に、十五箇所後の朱印が捺されている。この印は、蓮台宝塔形で中央に「神」字を含む。

○［5・9 BA］　所在未詳本　　巻上中下　三巻

「弘文荘待賈古書目」（第三七号、昭四五・六）所掲写真による。筆者未見。

足利初期、応永二十五年（一四一八）刊の根来版であり、当版は大正新脩大蔵経、別本二（和本）の底本でもある。巻上の巻首二葉は補写による。題簽下に「祐来」（伝得者か）とある。

（巻下　刊記）

応永廿五年八月廿三日　大伝法院恵淳

巻上は二月九日、巻中は五月三日となっている。右に続いて刊行後まもなくの墨書奥書があり、次に左がある。

（朱）正長二年八月八日自十輪院賜三部秘経早

全巻に、(A)朱点（ヲコト点・声点あるか、正長三年（一四三〇）か）、(B)墨点（仮名点、同じ頃か）が施してある。

恵淳は、応永二十三年に金剛頂経三巻、同二十四年に大日経七巻をも刊行している。大伝法院は、新義真言宗紀州根来寺に於ける四大伽藍の一で、覚鑁（康治二年（一一四三）寂、四九歳）の移設に創まる（大治五年（一一三〇））。

○［5・10］　所在未詳本　　巻上中下　三帖

東京古典会主催「創立五十週年記念古典籍展観大入札目録」（昭三五・一一、上野寛永寺）による。筆者未見。

粘葉装新型本。表紙左下に「金剛資敬尊」との墨書があり、内題下に「高山寺」の方形単郭朱印がある。訓点の有無は未詳だが、敬尊（建仁元年（一二〇一）―正応三年（一二九〇））は、戒律宗の復興を計った西大寺南京律の碩学であり、小野流（三宝院定海）の法流にも連なる。

○［5・11］　所在未詳本　　巻上中下　三帖

文安・嘉吉に刊行せられた東寺版であるが、訓点その他については未詳である。筆者未見。

――以上　昭和四九年五月二六日現在――

NII-Electronic Library Service

The Society for Research in Kunten Language

注

1 経師充経帳、天平九年八月・同十年潤八月、大日本古文書、七の一〇九・一一三頁。

2 田中海応「蘇悉地経につきて」密教、第四号第一号。

3 高山寺蔵転非命業抄の奥書、建仁三年の覚経の記。

4 築島裕「高山寺本表白集」高山寺資料叢書第二冊、九三三・九五〇頁。

5 遠藤嘉基「訓点資料と訓点語の研究」所引。

6 同経蔵には、当本と全同の奥書を有する一本（第二函第一四一一六号）があるが、訓点は存しない。

7 高山寺蔵持経講式の本奥、建保二年の高弁の記などにかくある（第二部第四一号）。

8 栂尾祥雲「金剛頂経概説」二頁。

9 東寺蔵千炎眼観自在菩薩法経一帖の奥に、文和三年（一三五四）六月、呆宝は栄宝に誂え書写し、校点したとある。これが東南院点とやや近くてかなり合致しない例であるとされる（点研、三七四頁）。

10 田中塊堂「日本写経綜鑑」三三六頁。春日政治「古訓点の研究」九六・七九頁。

11 曽田文雄「訓点語彙（一）高野山光明院所蔵蘇悉地羯羅経寛弘五年点」訓誌、第三輯。

同「（同）承保元年点」訓誌、第八輯。

同「高野山光明院蘇悉地羯羅経寛弘点の識語」訓誌、第二五輯。

12 本寺常院記、及び、当竹林不共記、仁和寺史料・寺誌編二、二八四頁・二六五頁。

13 仁和寺御伝（顕證本・心蓮院本）、仁和寺史料・寺誌編二、一一七頁・八頁。

14 小林芳規「平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究」七〇五・九二頁。

15 築島裕「平安時代の古訓点の語彙の性格——大日経の古訓法を例として——」国語学、第八七輯。

16 仁和寺諸院家記（恵山書写本）、仁和寺史料・寺誌編一、二九五頁。

17 田中久夫「却廃忘記」校注、日本思想史大系鎌倉旧仏教、二四頁。

18 高山寺資料叢書第一冊、所収、翻刻本文 五九五頁。奥田勲氏解説、七三二頁。

19 高野山宝寿院蔵一髻文殊念誦儀軌一帖の奥書の一条に、「大治元年（一一二六）四月十八日於日蔵房書了」とみえる（竹内理三編「平安遺文 題跋編」二〇九頁）。

NII-Electronic Library Service

The Society for Research in Kunten Language

20 室幢院点・西墓点・喜多院点・円堂点を併せ用いる覚成（仁和寺覚法法親王資、建久年間写、点研、三九頁）や、西墓点・円堂点を用いる叡算（高山寺蔵金剛頂一切如来真実摂大乗現証大教王経寛弘五年の白点・朱点）の如き人物がいる。

21 日本高僧伝要文抄第二（池上阿闍梨皇慶伝）、新訂増補国史大系第三一巻、七〇頁。

22 多紀道忍「天台声明の梗概」東方書院。

23 本朝台祖撰述密部書目、大日本仏教全書、書籍目録第二。

24 村上雅孝「延慶と明覚をめぐって――日本悉曇学史における一問題――」国語学研究、第一〇号。同「東北大学図書館所蔵蘇悉地羯羅経古点」共立女子大学文芸学部紀要、第二〇輯。

25 続群書類従、第二七輯下、西塔条。

26 叡山文庫蔵息心抄、内第六冊ノ一・第七冊ノ二の奥書、建久六年の寂舜の記。

27 馬渕和夫「日本韻学史の研究」五、一三三頁。

28 吉沢義則「国語国文の研究」三六頁。

29 築島裕「天台宗のヲコト点について」訓読、第三二輯、八四頁。同「天台宗の古訓点について」伝教大師研究、昭四八・六、八二〇頁。

30 松本健二「京都大学図書館本蘇悉地羯羅経延喜点の星点イについて」訓読、第五四輯。

31 後葉和歌集巻二五、比叡の山に法華経信解品の心を詠むとして「にせう法師」とみえる。後考を俟つ。

32 古点本類聚書には、この他、「鎌倉之大教房」・「守治大教房」が散見する。別稿。

33 吉沢義則「点本書目」三頁。又、平安遺文 題跋編、七四頁。朱筆の仮名点がある。

34 築島裕「訓点資料の年代的性格」上代文学論叢、五三頁。

35 拙稿「広島大学蔵仏説六字神呪王経の訓点」国文学攷、第五九号。

36 山田孝雄「典籍説稿」一九三頁。

37 小林芳規「平安中期訓点資料の仮名字体と訓読法」国語と国文学、昭四九・四。

38 注23文献、書籍目録第二、二八九頁。

NII-Electronic Library Service

The Society for Research in Kunten Language

付記　古点本の調査に関し、御蔵所当局各位より格別の御高配御指導を賜った。又、稲賀敬二・大坪併治・川瀬一馬・小林芳規・築島裕・沼本克明・藤原与一その他の諸先生方には多大の御指導を仰いだ。記して深く感謝し申し上げる。

――昭和四十九年七月二十五日――

NII-Electronic Library Service